はじめに

子どもは、ミライだ！

ミライとは遠い将来ではなく、ボクらの目の前にいる子どもそのものです。
すべての子どもは、〝未来人〟です。
子どもが変われば、世界が変わります。

はじめまして。
ドキュメンタリー映画作家のオオタヴィンです。
子どもをテーマにした3本の長編ドキュメンタリー映画をつくってきました。『いただきます1　みそをつくるこどもたち』『いただきます2　ここは、発酵の楽園』『夢みる小学校』。つくればつくるほど、撮れば撮るほど、子どもはミライそのものだ、と実感しています。
ひとりの子どもは、すべての〝過去の果実〟であり、〝ミライの種〟です。命は単体の存在ではなく、過去とミライをつなぐ生命の環（circle of life）なのです。子どもたちが

ひとりもいなくなった世界を想像してみてください。なんて淋しい世界でしょうか。

子どもたちは、希望そのものです。
ボクらは、どんなミライをつくるのでしょうか。
ボクらは、ミライに何ができるのでしょうか。

ドキュメンタリー映画って「客観的な記録映像」だと考えている方も多いでしょう。でも、多くのドキュメンタリー映画監督が「あらゆるドキュメンタリーは個人的な体験記だ」[*1]と書いています。確かに自分で映画をつくってみると「客観的記録なんて存在しないのだ」と実感します。監督の主観によって、同じ素材でも180度異なった記録映像をつくりだすことも可能だからです。

ドキュメンタリーの映画監督は、童話の『北風と太陽』に例えると、おおまかに北風派と太陽派に分かれます。問題を鋭く告発したり追及したりする「北風派」が、ドキュメンタリー映画の主流です。

僕は「太陽派」なんですね。あえて、自分が怒っていること、理不尽なことについての映画をつくりたくないんです。

「これはいいですよ、ほら、こんな風にいいんだから、ねっ、すてきでしょ」っていう映画をつくりたい。発酵食とか、オーガニック農業とか、自然保育とか、自由教育とか、現在の日本では、まだマイナーとされている題材（でも、持続可能な社会には大切なも

＊1　例えば、こんな本に書かれています。
『それでもドキュメンタリーは嘘をつく』
森達也著
角川文庫
『なぜ僕はドキュメンタリーを撮るのか』
想田和弘著
講談社現代新書

の）を、堂々と、やさしく、エモーショナルにお伝えしたい。

僕の映画は、ドキュメンタリー映画なのにちょっと詩的な語り口なんです。

「ポエトリー・ドキュメンタリー」と命名しました。

1本のドキュメンタリー映画をつくるためには、長期の現場取材、科学的なエビデンスの検証、識者の最新インタビューが必要です。そうして凝縮された映像情報を、僕は「詩」のように観客のみなさんに手渡したいのです。本書の文体も映画文体に合わせて、ちょいちょいポエトリーします。そうすると、書体が変わり、とっても主観的な世界に突入しますので、よろしく。

僕の映像作品は、こんなミライになっていくといいのにな、という「ミライのドキュメンタリー映画」です。そこは、AIが管理するハイテクでクールなミライじゃなく、どこかほんわか「なつかしいミライ」[*2]、そして「発酵のミライ」です。

土のなかに微生物がいなければ植物は生きられず、植物がいなければ動物は生きられません。微生物は、生命の環のまさに〝土〟台なのです。さまざまな現場の取材を通して、「発酵は、微生物と共生する幸福感を伴うもの」と確信しました。

「発酵のミライ」は、アフターコロナの世界でも、きっとよろこびに満ちているでしょう。

＊2　なつかしいミライ：『懐かしい未来　ラダックから学ぶ』
原題「Ancient Futures」
ヘレナ・ノーバーグ＝ホッジ著
山と渓谷社刊
「幸福」についての視点を変えてくれる本です。

僕がつくってきた映画を俯瞰してみると、希望を感じる場所やすてきな人を探しながら、なつかしいミライへの道標としていたことに気づきます。
詩集のような、地図のような、このふしぎな本が、子どもたちが幸福なミライへと向かうガイドブックになればうれしいです。

土はふくよかなままに
水は清らかなままに
子は健やかなままに

美しきものが
地に満ちますように

オオタヴィン

目次

はじめに……02

第1章
みそをつくるこどもたち
食べたものが、わたしになる

門をくぐると　そこは昭和だった……26
『はなちゃんのみそ汁』と出合う……33
そして、映画がはじまった……36
1970年代のミステリー……40
祖先の道に還ることは、
文明の退化ではない……44
西園長は、武士だった……49
さらば、園長……53
ソウルフードがある幸福……55
ポエトリー・ドキュメンタリーの
つくりかた……57
タネをまく人……60

第2章
ここは、発酵の楽園
食べたものが、心になる

そうだ、『いただきます2』をつくろう……82
180度変わる微生物の常識……87
〝オーガニック野菜は、虫食い野菜〟

という誤解……90
〝オーガニック農業は重労働〟という誤解……93
世界を逆さから見る男……96
微生物は、りんごの守り神……99
菊地さんが目指すは、食養農業……102
毎日、「薬」を食べよう……103
雑草という草はない……106
里山保育が育てる地球の子どもたち……109
みそは、おかあさんのお守り……111
おこめのかみさま……113
クラウドファンディング、してみた……116
究極の健康法？……118

第3章 夢みる小学校
まず、子どもから幸福にしよう

「先生」がいない!?
子どもが主役の学校……130
「学年」がない、「テスト」がない、「成績通知表」がない……133
愛があふれる職員室……136
本籍地は子どもの村、現住所はパジェロ……139
旅立った子どもたち……142
僕は「発達障害児」だった!?……144
「教育システム」が「発達障害」をつくる……146
ミライの学校……150
実は公立学校も自由だった……154

「いただきます　みそをつくるこどもたち」2017年劇場公開

第１章

みそをつくるこどもたち

食べたものが、わたしになる

The child
is
the future

門をくぐると　そこは昭和だった

保育園の門をくぐると、
そこは、〝昭和〟だった。

昭和の子どもたちが、キラキラと発酵していた。

その保育園の園庭は、小石がなく、さらさらした砂場でした。
朝のまぶしい光のなかで、数人の子どもたちが大きな竹ぼうきをさっさと使って、
砂地にきれいな掃き目を刻んでいます。
そんな、小坊主さんみたいに風流な庭そうじを、
子どもたちが遊ぶようにしているではありませんか。

僕が、高取保育園をはじめて訪れた朝のことです。

数人の子どもたちが、園舎の長い長いひのき廊下を、
鮎が並んで川を遡(さかのぼ)るように、だだっだだっっだだぁぁと雑巾がけをしていきます。
ちいさなおしりがならんで、なんとも微笑ましいのです。

なるほど、凛(りん)か。
お手伝いをきびきびと愉快に楽しんでいる様子が伝わってきて、
凛凛とした気配が響いているのです。

僕の小学生時代は、昭和40年代。いまから50年ほど前です。
ドラえもんに出てくるような空き地で子どもたちが毎日遊び、
冬など手を真っ赤にしながら、小学校の板張り廊下を、
はぁはぁ雑巾掛けをしていた、そんな「昭和」です。
お手伝いにはげむ子どもたちの姿は、まだ、町中のあちこちに見られました。
この保育園には、なんだか、あの昭和にタイムトリップしてしまったような、
なつかしい空気が ただよっているのです。

さてさて、お昼です。
なんともかぐわしい香りが、ふわふわと立ち込め、いよいよ、ごはんの時間です。

２００人の子どもたちが飲むみそ汁が、
大きな鍋にゆらゆら揺れて、いくつもいくつも運ばれ、
そこいらじゅうを麹の粒子でいっぱいにしているのです。
軟らかく炊かれた玄米は、正しくお櫃に入って、
幸福な湯気をふりまいております。
子どもたちがお櫃から、せっせとお椀にごはんを盛りつけていきます。

玄米、みそ汁、魚の煮物、ひじき、それから納豆。
ハンバーグも、パスタも、オムライスも、マヨネーズも、ケチャップもない。
カタカナのメニューが、どこにも見あたりません。
食卓の上は、それはそれは控えめな茶色一色となり、
清楚な和の伝統が輝いているのです。

部屋のあちこちから、澄んだ歌声がこだまします。
♪よっく、噛めよ、食べ物を、噛めよ噛めよ噛めよ身体がぁ強くなる～
これは「よく噛めよのうた」だそうです。

ひとしきり歌い終わると、給食当番さんが高らかに宣言するのです。
「１００回噛んで食べましょう、いただきます！」

当番さんが、数をかぞえ、それに合わせてみんなで一生懸命噛むのです。
「1、2、3、4、5、6、7、8、9、10」
もぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐ。
「11、12、13、14、15、16、17、18、17、あっ、19、20」
もぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐ、あっ、もぐもぐ。
（これが100までずっと続くとおもってください）
最初の一口めは100回噛んでから、ようやく食べはじめるのです。

さぁ。おなかがぺこぺこの子どもたち。
おみそ汁のたまらない薫りがほわほわ漂う食卓を前にして。
じっとがまんして。100回噛んで噛んで。
唾液とおなかのエンジンは、ぶんぶん音をたてるくらいに全開です。
そこからの食いっぷりの見事さといったら。

あちこちで、一斉に皿にかぶりつくのです。
玄米を、わしわしかみくだき。
納豆の糸を、ぷるぷるたらし。
煮魚に、がりがりかぶりつき。
みそ汁を、ぐびぐびおかわりする。

わしわしぷるぷるがりがりぐびぐび。
わしわしぷるぷるがりがりぐびぐび。

いのちの合唱がこだまして。
発酵した食べものが、幼い命に響き合って。
なんだか、部屋中がおまつりのように、わきたっているのです。

子どもたちがグイグイ食べる姿って、なんて気持ちがいいんだろう。
僕は、まぶしい目で見ていたのです。
おみそ汁を、ふうふう、はふはふ、飲み干す可憐さ。
皿に残ったひじきのかけらを、つたない箸さばきで、
しこしこ集めて食べている愛らしさ。
なかには、食べながら寝ちゃった子どももいます。
勢い余って、ぺろぺろ皿をなめるしぐさ。

元来、僕は半端ない子ども好きです。
3、4歳の子どもって、ただでさえカワイイのに、

それが、一度にどっと200人です。
カワイイカワイイカワイイが、200カワイイなわけです。
たまりません。たまりません。と、2度言いながら。
その200カワイイが、それぞれ、てんでに、
はふはふ、むしゃむしゃ食べているわけですから、
もう、なんだか1億カワイイ世界が、燦然（さんぜん）と展開されているのです。
あちこちで、原始的な生命の光が10億くらい爆発しているようです。
子どもたちは、キラキラ発光して、発酵していました。
長い檜（ひのき）の廊下も、お砂場も、昇り棒も、発光してます。
その光に、くらくらしてくるのです。
くらくらしてくるのです。と、また、2度言いながら。
まるで森林浴のように、子どもたちの清々（すがすが）しい光を浴びていました。
子ども浴です。

いのちが、いのちを食べている。

神々しい。
そう、感じたほどです。

僕の心のスクリーンに、映画はすでに完成していました。
子どもたちが給食を食べている。

それだけの映像なのに、そこには深い世界観が浮かんでいたのです。
もう、「昭和」というより、「江戸の寺子屋」っていう感じで。
もう、「縄文の子ども」を発掘しちゃったよ、という感じで。
もう、「生命の根源」にまで立ち会っちゃったよ、という感じで。

・・・

高取保育園[*1]を訪れた初日の印象を、ちょっと〝ポエトリー〟してみました。
わずか一回の給食に立ち会っただけで、映画をつくることを決めてしまったのです。
「ああ、これは、すごく良い映画になるなぁ」と感知したことを（それまで映画をつくったこともないくせにね）、なぜだか、はっきりおぼえています。

このあと、僕はこのふしぎな保育園を一年にわたり撮影することになります。
そうして、いくらかの思索と、その謎を紐解いていくわけです。

＊1　高取保育園：
福岡市早良区にある認可保育園。
全国から視察が絶えない食育保育園です。

『はなちゃんのみそ汁』と出合う

はじめて安武信吾さん[*2]と長女のはなちゃんと会ったのは、映画『はなちゃんのみそ汁』クランクインの前でした。映画のメイキング映像をつくる仕事の依頼でした。

安武信吾さんの奥さんの千恵さんは、ひとり娘のはなちゃん（当時5歳でした）を残して乳がんで亡くなります。残された最後の最後の短い時間に、千恵さんができることは、もう、ほんとうに限られていたのです。千恵さんは、こう考えました。

私はがんになった後に、娘を授かりました。
だからこの子を残して死ななければなりません。
だとすると、心残りがないように死ななければなりません。

千恵さんは、5歳のはなちゃんを台所に立たせます。
包丁を握らせ、みそ汁の作り方を伝授するのです。
〝みそ汁さえ作れれば、なんとか生きていける〟
千恵さんは、娘にみそ汁のつくり方を教えて旅立ちます。残されたはなちゃんは、悲し

＊2　安武信吾：
福岡県生まれ
西日本新聞社に勤務。
『はなちゃんのみそ汁』：
安武信吾・千恵・はな著
文春文庫刊